

解を深める

- ・協力してくれた赤ちゃんと親に感謝の気持ちを表す
- ・仲間と話し合い、プレゼントをつくる
- ・プログラム参加を通しての感想と振り返り

用意するもの

- ①毎回の教材、赤ちゃんのおもちゃ、出産当初の写真
- ②「赤ちゃんノート」
- ③赤ちゃんテキスト「ノーバディズ・パーフェクト・シリーズ」を参考
- ④出席表：出席状況を自分で確認・管理し、終了証につなげる。

※ 「赤ちゃんノート」

ねらい

- ・観察のポイントを明確にして学習効果をあげる。
- ・赤ちゃんの気持ち・自分の気持ちに向き合う。
- ・継続参加ができない場合や観察対象がセッションにより異なる場合等の状況においても、参加の意味を深めることができるようにする。
- ・写真を貼る等して、心に残る記録をつくる。

記入内容

- ①以下の観察のポイントをおさえる
 - ・からだの発育、成長・・・身長・体重・生歯その他
 - ・姿勢、運動・・・握り方・座り方・移動のしかたなど
 - ・あそび・・・興味・関心・おもちゃなど
 - ・ことば、コミュニケーション・・・泣き・発声・発音など
 - ・感情、気持ち・・・怒り・喜び・悲しみ・恐れ
 - ・機嫌のよさ・なだめやすさなど
 - ・赤ちゃんの生活・・・生活リズム 食事・睡眠・排泄・清潔などの世話
 - ・病気への対応・安全など

- ・人とのかかわり・・・親との愛着形成・依存と活動の欲求の表現
- ・親とのかかわり方、コミュニケーションの方法など
- ・その他

②発達指標をチェックできる絵や図をいれる

③セッション毎の学習アンケート

- ・質問内容は赤ちゃんの月齢や生徒の年齢を考慮する。

④感想、自由記述欄を設ける。

- ・赤ちゃんだけでなく、自分の家族のことなどについて、気付いたこと・感じたこと・印象に残ったこと。

ふりかえりシート・まとめ（学習アンケート）

*赤ちゃんの様子から

- ・4ヶ月の赤ちゃんでも、すでに好きなことがあると感じた。
- ・物音に敏感に反応するし、何でも口に持っていこうとしていた。
- ・赤ちゃんの体は、プニプニして柔らかかった。
- ・4ヶ月で生まれた時の2倍の体重になって、ビックリした。
- ・3ヶ月の間に顔つきも変わっていたし、一人で座れるようになっていて、成長しているんだな—と思った。

- ・お母さんに遊んでもらって、とても嬉しそうだった。お母さんになりたいと思った。

*お母さんの様子から

- ・子どもの泣き方で、おなかが空いているか眠たいかがわかるなんてすごい。
- ・お母さんが赤ちゃんのことをよく分かっている、なにをして欲しいかがわかるのが、すごいと思った。
- ・お母さんは、子どもの目を見て名前を呼んでいた。やりとりをみていると、赤ちゃんが安心しているのがよくわかる。
- ・母親との信頼関係が強いことを感じた。

・泣いてもすぐに泣きやめるのは、お母さんの力だと感じた。

活動に参加して

①この活動に参加して私は

- ・ お母さんが好き
- ・ びっくりすることが多かった
- ・ 今まで以上に、かわいいと思うようになった

②自分自身について私は

- ・ まだまだです
- ・ 消極的？

③親について私は

- ・ どういう子なのだろうか？
- ・ 感謝しています
- ・ 自分のこと、なんでもわかっている

④生命について私は

- ・ 大切なんだ
- ・ すごい！
- ・ 小さくても大事

⑤恋愛について私は

- ・ 理解不能？
- ・ 人生の勉強
- ・ 必要

⑥仕事と子育てについて私は

- ・ 大変だと思う
- ・ みんなと親子みたいになりたい
- ・ 子育てを優先したい

⑦友だちについて私は

- ・ 一生の財産
- ・ 大事

⑧地域の人々について私は

- ・ 知りたい
- ・ 近所で仲良くしていきたい
- ・ 親切な人が多い

⑨これから私は

- ・ たくさん勉強したい
- ・ 保育士をめざして頑張る
- ・ どこへいくのだろう？

⑩この活動が地域の中に広まっていくためには

- ・ 口コミ

まとめ

センターにボランティアとして来ていた高校生を中心に、触れあいプログラム

をおこなった。初めは少し緊張していたが自分が差し出したおもちゃに、赤ちゃんが手をのばしてくれると、もっと反応を引き出そうと積極的にかかわっていく姿が印象的であった。

どんなに泣いていても、お母さんがしっかりと抱いてあげると泣き止む様子から、赤ちゃんが心からお母さんを信頼し安心していることに感動を覚え、一人の学生が思わず、「私もお母さんになりたいな」と、目を輝かせて言っていた。

赤ちゃんの表情やしぐさ、声などから、赤ちゃんが何を考え、要求しているのかを想像することで、相手の気持ちに共感していく姿が出てくる。何をしても泣き止まなかったり、夜中も何度も起きるなどの話を聞き、親の大変さを思ったり、自分もこんなふうに必要な存在として育てられてきたことへも思いをめぐらす良い機会となった。できれば、もっとたくさんさんの参加が可能になるよう、学校や児童館などへ親子が出向いて行くことが必要と考える。

(6)中高年世代との交流プログラム

①びーのびーの 「子育てサポータープログラム」

実施ひろば名
おやこの広場 びーのびーの

実施担当者名
事務局長：原 美紀・サポーター連絡
担当：畑中祐美子
ひろばスタッフなど

プログラム内容

①ひろばでのボランティア

登録人数 18名。

総活動時間は1808時間（平成16年度）

今年はサポーターさんがひろばにいない日はないほど、安定してひろばに入っていた。活動日は、各人が希望の日時をひろばの予定表に書いて調整。曜日毎に固定化が目立った。サポーターの希望により、ひろば行事に入るってもらった。例えば、誕生会でのピアノ演奏やオカリナ演奏。赤ちゃんサポート希望のサポーターが水曜日の赤ちゃん広場に入るなど。また、スタッフ研修・講座の際の託児、週末外部イベントなどの出店手伝いなどにも、多数のご協力をいただいた。月1回の全体会にも参加してもらい、研修も行った。

②ひろば内・外行事への参画状況

*季節プログラム参加

8/30 「夕涼み会」カキ氷や花火で夏の終わりを楽しむ

9/24 「お月見団子を作ろう」会員さんと一緒にお団子づくり

10/22 「臨港パークへ行こう」外遊びへ同行した。

12/17 「クリスマス会」にてアンクルンという竹の楽器による演奏

*交流事業などへの参加協力

9/11-12 商店街秋祭り(ビアガーデンなど出店手伝い)

10/24 らくらく市

10/11-13 日本丸だがし屋楽校(出店手伝い)

(※2/19「マタニティコンサート」設営協力)

*託児・その他

6/26 「幼稚園シンポジウム」における託児

10/16 家庭育児支援事業反省会における託児

10/16 サポーター・学生ボランティア・スタッフ交流会への参加

11/12-14 妙蓮寺木のおもちゃと絵本のお店(布おもちゃ製作)

12/5 「保育園シンポジウム」における託児

③特技、趣味、キャリアを生かした交流
*NPO法人会計支援、マネジメント支援(元銀行支店長)

*木工(木のおもちゃ制作や修理・ひろばの備品制作や修理、小学生向け木工)

*料理(小学生向けうどんづくり支援)

*裁縫(クリスマスプレゼントづくり、布おもちゃ制作)

④「サポーター連絡会」隔月1回実施

日々入れ替わるシフト体制の中、隔月に1回、サポーター一同と、スタッフの連絡・意見交換。活動の振り返りの場としてもサポーター連絡会を開催した。率直な意見交換と、情報交換ができることが有意義であった。

	実施日時	場所
第1回	2004年5月25日(火) 13:30~15:30	港北区社会福祉協議会 3階対面朗読室
第2回	2004年7月27日 (火) 13:30~15:30	港北区社会福祉協議会 3階対面朗読室
第3回	2004年9月28日(火) 13:30~15:30	港北区社会福祉協議会 3階対面朗読室
第4回	2004年11月30日 (火) 13:30~15:30	港北区社会福祉協議会 3階団体交流室
第5回	2005年1月28日(金) 13:30~15:30	港北区社会福祉協議会 3階対面朗読室

*実施対象者

○人数：18名

○子育てサポーター連絡会は、おやこの広場びーのびーのにおいて、親子の見守りや、環境整備などの分野において、スタッフの活動を支援する『サポーター』全員を対象としている。子育てサポーターとしての活動を希望される方は、事務局、担当が面接を行い、

ひろばでの活動の意思、得意分野などのヒアリングを行う。所定登録用紙(添付別紙資料:サポーター登録簿)に記入、登録、活動に参加する。

***実施の方法と概要**

- 隔月1回開催(ほぼ最終火曜午後)
- 概要…サポーター及び、スタッフ実施担当者にて懇談会
- 議題…・スタッフ実施担当者よりの伝達

- ・その時期のひろばの様子、サポーターが参加した行事の報告
- ・利用会員の声の伝達
- ・今後の行事予定(ひろば行事・スタッフ研修についての参加募集など)

- サポーター側からの伝達
 - ・各自の次月の活動予定調整、ひろばでの活動の中の感想(スタッフに伝えておきたい親子の様子や、ひろば環境のこと、要望等)
- 次回連絡会の日程調整

***実施結果**

- サポーター連絡会参加者の感想から
 - ・サポーター同士は、なかなか、顔をあわせる機会がないので、隔月1回ではあるが貴重な機会である。
 - ・ひろば内のことにとどまらず、内外の研修の様子などの記録配布もあり、情報が得られることが有意義だ。
 - ・他のサポーターの話を知ったり、自分の活動を話したりすることで、自分の活動に対して、振り返る作業ができる。その後の活動にとっても役にたつ。
- 実施スタッフの感想
 - ・意外な意見がきけたり、サポーターさんの意外な一面が見られたりする。そのことでも、人間関係をスムーズにし、支援してほしいときに率直に声をかけることができるような気がしている。
 - ・スタッフを代表して出ていると思うと、会ででた内容を全体にフィードバックする責任の重さを感じる。

評価

- プログラム実施の意義
- ①ひろばでのボランティア
 - サポーターさんの定着率が高い。ほとんど曜日を決めて固定的に入られる方が多い。人生経験も豊富な先輩として、ス

タッフが気づかないところで、親子との関わりがあったり、おもちゃや、衛生面での気づき等、ひろば運営に欠かせない存在となっている。

②ひろば内・外行事への参画

外遊び企画など子どもを連れているスタッフのフォローや、自主企画セミナーなどでの託児部門を大いに担ってくださった。特に、スタッフの子どもたちは、見慣れたサポーターさんが入ることで精神的にも安定感があった。

③特技、趣味、キャリアを生かした交流
木のおもちゃ作りや法人のマネジメントなど退職サラリーマンならではのキャリアを生かした支援をしていただいた。布おもちゃは、販売会で大人気となり、法人の収益活動にも寄与した。

④サポーター連絡会

・連絡会の実施の背景
サポーターは、日々の活動の中で、スタッフの黒子的存在に隠れているような方が多い。ひろばでは、スタッフが気づかないところで、親子やスタッフへのフォローがあったり、おもちゃや、衛生面での気づき等たくさん持っている。しかし、時間で入れ替わるスタッフには、伝える時間もなく、サポーター相互としても、入れ替わりのシフト制の活動のため、意見交換の場が少ない。スタッフの申し送りの日誌もあるが、サポーターは日誌記入までの活動に一種ためらいを感じる方々も多い。

***実施の意義**

そのような背景のもと、隔月1回でも、日頃の活動からの問題点や気づいたことなどを話し合うことは、『ひろばの充実』に直結していると考える。

～環境面～

例えば、おもちゃの拡充や、レイアウト変更が、サポーター連絡会で出た意見を元に行われた。

～ひろば利用者への意義～

連絡会の中で、気になる親子として話題のあがったケースは、スタッフ全体にも伝達される。親子へのアプローチを全体として考えるきっかけとなったことがあった。

～サポーター自身の負担感の軽減～
気になる親子の話などを抱えたままにいるつらさもあるのではないかと考えられる。連絡会を通して、そのつらさをスタッフ、その他サポーターへ話すことで、個人の精神的負担を減らす機会ともなりえ

ている。

～サポーター自身の活動の振り返り～
他のスタッフ、サポーターとの意見交換を
図ることで、サポーター自身の活動への
振り返りにも有意義であると考えている。

～運営スタッフ側～

運営側としての説明を詳細に行える貴重
な機会であり、支援してほしい内容、支
援体制などについて、率直に話し合うこ
とができる。スタッフ内部研修、その他
外部研修などの内容も、記録配布によっ
てサポーターとの共有化も図っている。

～サポーター間・スタッフ間との親睦～
茶菓をとりながらの会合ということもあ
り、親睦を深める結果ともなっている。

○プログラムの課題、改良点について

関係者全員参加が難しい。議事録配布
も行っているが、対象者によって、F A
X・メール添付・郵送など煩雑であり、
手続きの簡素化を含め、情報・意識の共
有が課題である。スタッフ側担当者は固
定しているが、固定していることで話し
やすい雰囲気作りもできる反面、他のス
タッフとサポーターとの意見交換の必要
も感じる。

②手をつなご

「中高年のボランティアプログラム」

実施広場名

NPO法人 手をつなご親子のつどいの広場

実施担当者

千葉 勝恵 (63 歳) (つどいの広場育児サポーター・理事長)
小野 郁子 (つどいの広場月曜責任者・理事)
平井紀代子 (つどいの広場火曜責任者・理事)
山村由美子 (つどいの広場金曜責任者・理事)

参加ボランティア (60 歳以上)

秋葉 節子 (71 歳女) (広場育児サポーター・理事)
飯塚 文子 (63 歳女) (広場育児サポーター)
伊藤 忠文 (74 歳男) (広場でのおもちゃの修理)
大澤 親紀 (70 歳男) (広場育児サポーター・企画)
菊池みい子 (71 歳女) (広場育児サポーター・理事)
北川 君子 (69 歳女) (広場育児サポーター)
斉藤 キヨ (67 歳女) (広場育児サポーター)
坂本久美子 (64 歳女) (広場育児サポーター)
佐藤マサ子 (68 歳女) (広場育児サポーター・副理事長)
下辻たづ子 (78 歳女) (広場育児サポーター)
高橋 君代 (62 歳女) (広場育児サポーター)
宮田 幸子 (63 歳女) (広場育児サポーター)
室井 秀 (73 歳男) (広場・折り紙指導)

実施日時

毎 (月・火・金) 10:00~16:00

実施回数

基本的には各自が希望する曜日・時間を届け、各曜日のつどいの広場責任者のコーディネートの下、広場の育児サポートにあたる。中には、自分の好きな時間に来られる時という人、毎回午後という人、定期的に週一度など入り方は様々だが、各曜日の責任者の管理の下、サポーターとして参加している。外に 60 才以下のボランティアも多数いる。

実施場所

NPO法人手をつなご 親子つどいの広場

実施対象者

*広場への参加対象

親子つどいの広場の参加対象は 0~3 歳のこどもとその保護者。ボランティアの参加は特に規定はない。NPO 法人手をつなごは元々、中高年のボランティアグループから発足した子育て支援であるため、8 年目の現在も中心は中高年であるため、若いスタッフが増えてきてはいるが、中高年者のボランティア参加が多い。ボランティアの申し出により、理事長・各曜日の責任者が面接し、希望日時を受け、参加してもらっている。1 日の開催に参加するボランティアは 7~8 人。スタッフ研修・スタッフ交流会・育児講座等他行事への参加もする。特に資格や免許等は問わない。広場の中では自分の特技を生かしておもちゃの修理を担当したり、月 1 度定期的に母親達へ折り紙指導・親子のリトミック指導(42 歳)、不定期にはビーズ教室などの提供もある。

実施方法と内容

参加する時間帯により、それぞれ役割分担に多少の違いがある。

9:30~

掃除・おもちゃの消毒をする。各曜日のリレーで行き共に参加者が寮前にはボロボロを拭きながら、情報交換が成されたり、ペアが子どもの相手をする事も多い。交流の場でもあり、楽しい時間帯が持てるよ子どもが生まれて初めてゆっくり食事をすることが出来た」と、感謝されることもある。また、離乳食を与える時には子どもを抱いてあげたり介助することもある。スタッフは別室にてテーブルを囲んで食事する。

10:00~

- ・母子の参加を迎え入れる。
- ・受付 [各曜日の責任者が受け付ける]
- ・参加費を受け取り、名簿に出席日にちを記入・フェルト布の名札(母親用には名字記入、子供用には名前と生年月日記入)を渡す]
- ・遊びへの導入・見守り

母子がむりなく遊びに入っていけるように声を掛け、雑談しながら受け入れる。新規参加者には曜日の責任者が対応し、この広場の趣旨や利用方法・約束事などを説明、登録カードへの記入(住所・氏名・電話番号など)をお願いする。名札の作成。参加者の中には、グルーピングがされていないか等不安に思う人もいますので、導入は不安を取り除くことから始める。異世代のボランティアは「可愛いね。何ヶ月？」などと、子どもを受け容れるコツを良く知っていて、母親達の気持ちを受け止める術を知っている。また、自然な行為として行動にでる。地域の人達と顔馴染みだったり、地域の情報をもっていることでテリトリーでの話もスムーズに進む。深刻でない相談事には助言もし、会話しながら子どもとも遊ぶ。時には前庭で外遊び(砂場遊び乗物遊びなど)や室内ではママゴトをすることも有る。基本的には、母親が責任を持って目配り気配りをする事は伝えてある。ボランティアにはボランティア保険の加入、また、法人でも独自に組み立てた NPO 法人保険に加入し、万一の事故には備えている。

12:00~ 昼食

広場で大きなテーブルを囲み、持参の弁当を食べる。子どもには子供用椅子を用意。離乳食の人のためには、お湯・電子レンジの使用も自由に出来る。時には

頂き物の果物や総菜なども提供される。母親達が食事の用意をしたり、弁当を買

13:30~

コーヒーブレイク(14:00頃になつたりもする)

別室にて、出来れば子どもと離れてホッとする一時を作る。「至福の一時」と表現するように、四六時中子どもといる母親達にとって、安心できる異世代のボランティアに子どもを託し、お茶を飲むことの幸せが持てる時間である。母親達のテーブルにはお土産でいただいたものなどが並ぶため、子ども達は感づいてか、欲しがって母親の元に来る子どももいる。無理に引き離すことはせずに、隣室で遊べる子どもの相手をする。コーヒーの準備はスタッフがするがカップの洗いなどは母親達が自主的に行う。ゆったりすると、その場を動かさず長時間話に興じている母親達も出てきているので、交替するように促したりすることもある。子ども達の様子によっては、子どもへのおやつ

15:00~

ボランティア・スタッフのコーヒータイム
親たちのお茶の時間が済むとスタッフの時間にす。切り替えをしないと、母親達がずっとこのテーブルを占領することになってしまう。午後からの情報交換の場ともなり、スタッフ交流の場でもある。

15:45~

そろそろ帰る人が出始めると、その準

備を手伝ったり、片づけの体制に入る。

16:00~

親子が帰る。バギーに乗せたり、おんぶしたり、自転車だったり手段は色々だが、子どもが飛び出さないように心を配り、帰りの準備を手伝い、見送る。

広場の片づけ・掃除機をかける。

ボランティアの仕事は終了する。

責任者は一日のまとめを日誌に記入し、PCへ参加状況を入れ戸締まり・火の元の確認をして終了となる。

実施結果

① スタッフ・ボランティアの感想

- ・地域三世代の交流の中で、ボランティアしていると言うよりは、活動は大変楽しいものであり、地域の中で自分の存在感のようなものさへ感じる。(複数)
- ・生きがいになっている。(78歳女) ・毎日が楽しい。(歳女・外多数)
- ・生活に張りがある。(多数) ・赤ちゃんのかわいさからエネルギーが貰える。(69歳女) ・孫がないので嬉しい。(63歳女) ・適度な運動になる。(63歳女)
- ・趣味だけではつまらない。(64歳女) ・健康によい。(78歳女)
- ・夫が定年退職で家にいるので、外に出たい(63歳女・他)
- ・人の役に立つことが嬉しい。(73歳男性)
- ・若い人と触れることにより、新しい情報が得られる。(63歳女)
- ・嫁達と話すよりも気楽に接することが出来るし、若い人の考えが少し分かるようになった。(78歳女) ・夫婦2人の生活に活力ある話題が出来る。(69歳女)
- ・仕事人間で来て子育てに関わってこなかったが、今になって妻の大変さが分かるようになった。(複数男)
- ・孫が大きくなって、寄りつかなくな

ったので、子どもに触れられて嬉しい。(74歳男)

- ・地域との接触が無く来てしまったが、地域の人を知ることが出来た。(70歳男)
- ・自分の経験から、何か役に立てればと思って参加している。(複数男性)
- ・嫁や息子の考えに納得できないものがある。若い人達の平均的な考えなのだと分かったが、教えなければ行けないこともあると思う。(70歳男)

② 広場利用者の声(アンケート調査より)

- ・実家が遠いので、ここに来るとホッとする。実家のように思える。
- ・親や姑から言われると、素直になれないが、スタッフの方達から言われると、素直に聞ける。
- ・相談が出来る。
- ・孫の自慢をする人がいる。
- ・子どもを可愛がってくれるので嬉しい。
- ・親のようだから安心できる。
- ・声をかけて貰えるのが嬉しい。
- ・「大丈夫よ」と、言って貰えるので安心。
- ・家に子どもとだけいると煮詰まってしまうので、話し相手をしてくれるので嬉しい。
- ・子どもは会話してくれない。
- ・ロウるさい人もいる。
- ・子どもが泣くと悲しくなったり、イライラしたりする。広場ではボランティアさんが抱いてくれたり、子どもをあやしてくれたりする。
- ・信頼できる。
- ・何でかなと思うようなことが気楽に聞ける。
- ・昔のことを教えてくれる。
- ・中高年の方達だと安心できる。
- ・優しい。
- ・子ども相手に遊んでくれる。
- ・パソコンなど教えてあげると感謝され、自分も役に立ったかなと、仕事していた頃が懐かしくなる。

- ・地域の中に知り合いが出来て嬉しい。
- ・ボランティアさんと買い物などで出会ったりすると、声をかけてくれる。
- ・自分が具合が悪かった時、子どもの面倒を見て貰えて本当に有り難かった。
- ・二人子どもがいるが相次いでインフルエンザに罹り、上がなおりかけで下の子を病院に連れて行けないので S. O. S. を出したら、とんできてくれ、ホットした。

評価

*プログラム実施の意義

地域異世代交流は、昔で言えば、地域の中で自然に成されていたことなのだが、近年、核家族化が進んだこと、家族の縮小化等から、大家族の良さが廃れてきている。特に都会では、人間関係が希薄になってきている。転勤族、共働き家庭の増加など地域との関わりを好まない人も多い。そんな中で、保育園に子どもを預けている人は、保育園で子どものことについて相談することも出来、子どもを介して友達も出来るが、専業主婦の子育ては、人との接点が少なく孤立しやすい。

少子化で育ってきた母親達は、小さな子どもと接する経験もなく出産・育児に取り組むことが多く、初めての子育てに不安感が強い。頼りたい親や親戚が側にいない上に、地域との関わりが出来ていないことも、育児の不安感を強くする。

育児書通り、マニュアル通りに行かず、ストレスをため込むことになる。顔馴染みの人、助けを求めた時、手をさしのべてくれる人、見守ってくれる人、声をかけてくれる人、微笑んでくれる人、共感出来る仲間プラス、母親の様な存在は、孤立しがちな子育てにとって大きな力になっているのは確かである。

*これからの課題

地域に根ざしたボランティア活動から生まれた広場であるが、その「場」を運営するための財政的な裏付けがない。民間の NPO 活動を推進し地域福祉行政への見直しを進めてもらいたい。行政の開催している子育て広場では、ボランティアの導入がされていなかったり、またボランティアの導入がされていても、制限や公平さなどを追求するために、温かい関わりに欠けているように見える。私の居住区の広場でも受付・広場管理が主な仕事で、最少人数の運営であるために、子どもと遊んだり、母親と親しく話をする事は少なく、見守りと言うよりは、放任か指導になっているのではないだろうか。行政との好ましい協働関係での運営が望まれる。委託も協働の一つの事業のあり方としての取り組みが進められようとしている。利用するものが求めているのは、温かい人間と人間の繋がりを求めているのであり、地域福祉の向上の大きなポイントと思える。地域が生まれ変わるには、行政は常に住民サイドに立って、課題の解決に努めるべきである。次世代育成支援対策の行動計画が本来の子どもを産み育てたい環境作りが進められることを望む。既にスタンバイしている中高年の住民パワーを地域福祉の向上に大いに利用していった貰いたい。

(7)アウトリーチプログラム

①みずべ

「子育て家庭訪問プログラム」

実施ひろば名

江東区子ども家庭支援センター「みずべ」

親子関係に不安や不満を感じながらも、ひろばに出てこない、あるいは出てこれない方も多くいる。一日中子どもと向き合い、家の中に閉じこもっている生活は、子どもの言動ひとつ一つが気になり、親の不安を募らせるであろう。また、そのような生活からくる不満を話せる相手がない環境では、どうしても弱い小さな子どもに、苛立った感情をぶつけることが多くなる。閉じこもった親子の生活は、子どもの自尊感情の育ちを阻み、親自身も自分の子育てに自信がもてず、外に出ることが一層困難になっていくことは、少なくない。

子育て家庭への訪問は、このような子育ての密室化を防ぎ、信頼できる訪問者を通して、親自身が外部の人たちとつながりをもてるようになることを目的として行うものである。そして、やがて地域の中で自分たち親子の居場所をしっかりとつくっていけるようにと願い、相手を信じて寄り添うことと考えている。

※ 子ども家庭支援センターが電話相談を行う中で、訪問が必要と感じられた家庭に対して、支援ワーカーが訪問したケースを報告する。

センターにかかってくる電話は、匿名であることが多いが、こちらは必ず最後に自分の名前を名乗るようにしている。それは、また電話をかけたいと思った時に「〇〇さんに」と、電話がかけやすいのではないかと思うからである。このケースの母親は、3回目の

電話の時に、担当の名前を指名してかけてきた。「このあいだ、自分の話をゆっくり聴いてもらえたので、嬉しかった」と言うのである。

家族構成：夫

妻（本人）

長男 4歳

次男 2歳

3男 1歳

電話の声は、話し方もあわせて、とても若い感じがする。長男は4歳だが、経済的なこともあり、公立の2年保育の幼稚園に入園を希望しているので、毎日、朝から晩まで3人の子どもの世話を追われて、疲れきっている様子が伝わってくる。夫は帰って来ない日もあるそうだ。1人で3人の子どもの育児をすること、しかも下の2人は年子であることから、その困難さは想像がつく。

何かをアドバイスするというよりも、4歳の子どもが大声を出しながら、家の中を走りまわっている、その時この人はどんな気持ちになっているのだろうか・・・と、相手の気持ちに自分も留まってみる。「センターは、大人の手が沢山あるから少しは、お母さんもホッとできる時間が持てると思う」と、ひろばに誘ったが、人が大勢いるところは苦手だとの返事だったので、思い切って訪問の話をしてみた。すると声の調子が変わり喜んで受け入れてくれた。

初めは1週間に1度のペースで、その後は2週間から1ヶ月と感覚をあげて訪問した。家の中は、子どもが遊べる状態ではなく、おもちゃも洗濯物も食べこぼしたのものも、ゴチャゴチャになって床に散らばり、布団も敷きっぱなしで、子どもたちはパジャマで生活していた。2時間程の訪問時間の半分は、お母さんとおしゃべりをし、あとの半分は、食べこぼしたものを拾いながら、子どもと遊ぶというふうにした。訪問した後に電話がかかってくる、昨

日は子どもたちが、いつもより早く寝てくれたと嬉しそうに話した。

4回目の訪問の時には、お茶をいれてくれたり「今日は納戸を一緒にかたづけしてほしい」と言うなど、訪問者に対して親しい感情を持ち始めたようだ。納戸の中もまた、物であふれていた。

「使わないのに、通販で買っちゃうんです」の言葉どおり、新品の小物が袋に入ったまま、無造作に置かれていた。物を買うことで自分の心を満たそうとしているのだろうか。何があるのか分かるように、また出しやすいように、種類を分けて並べると「かたづけ、上手ですね」と褒めてくれた。自分は今までそういうことを誰からも教えてもらえなかったことや兄弟は、いろいろ買ってもらったのに、自分だけには何も買ってくれなかった母親の話をしてくれた。

その後も一緒に味噌汁を作るなどしながら、野菜の切り方や茹で方などを覚えていけるようになったし、できることが増えていくことは喜びにつながっていく。

3人の子どもとだけの生活に他の人間が加わることで生活に変化が生まれ、その変化を受け入れることができると、まわりの状況は変わらなくても、その人自身の気持ちは変わっていくということを、この訪問を通して学ぶことができた。今は3男の発育のことをきっかけに、保健相談所ともかかわりをもてるようになり、自分自身が育つてくる中で、ずっと一人で抱えてきた問題を専門家のもとで少しずつ整理しはじめている。

匿名の電話相談の向こうで勇気をもって、あげてくれたその声を、私たちは聴き逃してはならないと思う。そして解決へ向けての一步をともに踏み出したいと願っている。

②まめっこ

「親子教室」

実施ひろば名

まめっこ

(北会場 名東会場 稲沢会場)

実施担当者

スタッフ*柴田恵子 加門ふみ代

樽田まゆみ 大野真紀子 山下聖子

おやつスタッフ：荒木友紀子 長屋紀子

子

ボランティア：大学生 数名

実施日時

年3コース

春・夏 各週1回10回コース

冬 週1回8回コース

1回9時半～12時

実施場所

北会場：名古屋市総合社会福祉会館

名東会場：生涯学習センター

稲沢会場：稲沢市勤労福祉会館

実施対象者

1歳から3歳の子とその親15組

実施の方法と内容

(1回ごとの詳しい方法と内容、展開)

会場

毎回ほぼ同じ場所に定め、確保は会場によって異なる。(抽選で確保する場合もある)担当スタッフが会場確保。

プログラム

9：30 スタート 自由遊び

10：00 一斉遊び

10：30 おやつ

10：50 ディスカッション

(Aグループ) テーマ遊び

11：20 ディスカッション

(Bグループ) テーマ遊び

11：50 エンディング

親にとっても子にとっても“ほっ”とできる場になればと願い、「親も子も主人公になる」を合言葉にしている。まめっこがこだわる3つの柱は「あそび」「ディスカッション」「おやつ」。親子の心地よい関係やちょうど良い距離などを、模索しながら新たな発見と出会いの場。

①あそび

子どもも大人も「好きなことを見つけて遊ぶ」を基本に、遊具は子どもの創造性を豊かに育むよう、こだわったものを設定。また、その日のテーマによる遊びを体験する。

(例：お正月遊び・豆まき・小麦粉粘土など)

遊具の具体的な設定は『模倣遊び』として、ままごと・おしゃれコーナー・お人形のお世話など、大人も関わることで、ごっこ遊びへの展開をはかる。

『五感の体験』として、粘土・水彩・さらさら・木のおもちゃなどで五感(見る・触る・嗅ぐ・聴く・なめる)を体験しながら遊ぶ。『みんなであそぶ』として、親子遊び・布遊び・手遊び・わらべうた・絵本の読み聞かせ・パネルシアターなど。

人と関わる中で楽しさ、面白さ、悔しさ、悲しさなどを感じ、大人も一緒に遊びを楽しみながら、心と体の成長を見守る。

②ディスカッション

毎回テーマに沿って話し合う。内容は主に「子どもの成長、家族のこと、夫婦のこと、自分自身のこと」などで、他人の話を聴いたり、自分の考えを話す中で、自分自身を見つめなおすことができる。

ただし、ここで話したことはここだけのことにしておくという約束のもとに、話したり、聴いたりする。

当日、二つのグループに分かれて、

パートナーを作り、その子どもを託児しあって、ほんのひと時のティータイムを過ごす。ほんのひとときでも、子どもと離れてコーヒーを飲むことも、自分の子以外の子どもと過ごすことも、大切なこと。

③おやつ

安全な、そして旬の素材を使った手作りおやつを用意する。アレルギーにも対応しているので、皆が同じものを口に運ぶ。大勢で食べることで、家では食べないものでも、ここなら食べるということもある。また、材料(素材)によっては、こんな調理の仕方もあるという発見。

④エンディング

それぞれが、マラカスやタンバリンなどの音の出る楽器を持ち、曲に合わせて輪になり歩く。これをしたら「終わり」という合図。曲が終わると楽器を袋の中にしまい終了。

参加者を送ったあとは、片付け、反省の時間となる。このときに、当日の反省、気がついたことを話し合い、次回への課題とする。また、次回の遊びやディスカッションのテーマや進行につき、打ち合わせをする。この時間は本当に大切である。スタッフ同士の密な話し合い・連絡が必要不可欠である。

実施結果

*利用者の声・感想

・遊びは普段家では出来ない遊びができたり、逆に家で子どもと遊ぶヒントもらったり、こんなに枠からはずれて遊んでもいいんだなあと固定観念がなくなったりするなど、教えてもらった事が多かった。冬でも裸足で過ごしたり、手足が汚れることを気にせず遊んだり。たまに外で遊んだりすると室内と同じ事をして少し違って感じたりした。エクストラは

日曜日に開催され夫の参加もあって、いろんな家族を知る機会になった。

・初めて会場に入った時に暖かく迎え入れてくれた事は今でもよく覚えています。三人目の育児では、かなりマイナスな気分になれずにいたのを、ディスカッションをする事によって自分に気付き、取り戻していけました。男女共同参画社会やジェンダーという視点からの発言には随分刺激され、自分の事を少し大切に考える様に、また夫も一人の人間に見えてきました。現実の壁は高いですが少しでも自分らしくありたいと思います。

*スタッフの感想

・親子教室参加時のスタッフから誘われて、当初は“お手伝い”として軽い気持ちで関わりました。親子教室に参加してくれる子どもたちにケガをさせないように一緒に遊ぶくらいの関わりでした。そのうちに、ディスカッションリーダー、プレイリーダーとしてかかわるようになってからは正直しんどかったです。“えっ！私がやっていいの？”1回1800円という決して安くない参加費を払ってきてくださっている母たちに達して後ろめたさなども感じました。また、週1回の親子教室に出ることで夫と小競り合いがありました。娘達にも試されました。女性は妊娠したときから外部から”母”にさせられる面があるということを経験が子どもを持って強く感じました。親子教室に参加してくれる母たちとかかわる中でその想いは一層強くなりました。子育て中に悩むことも、苦しむことも、すべて受け入れたい、しんどいけど受け入れたい、悩んでいたことがどうでもいいことになり、苦しんでいたことをいつの間にか忘れながら”母”になっていくプロセスを大事にしたいと思いました。そんな想いを母たちに発信したいと思いました。反面自分とまったく違う環境で子育てをしている母たちの話に耳を傾けることは私にとって大変なことでもありました。傍らにいる夫はそんな私に「い

い勉強になるね。」と一笑されました。(くやしいがあたっている！)

スタッフなんていわれるとどこかこそばゆい感があります。“フツーのおかあちゃん”としてまめっことかかわりたいといつもこの想いだけは忘れないように

・親子教室の2時間半は、子どもの著しい成長を実感しながら子ども達と遊ぶ事はとても楽しいのですが、一方で常に母たちの視線を感じながら2時間半過ごす事は、精神的にとっても疲れます。また”くろこ”としてのスタッフの存在も結構微妙で、しんどく難しい立場であると感じています。その後の反省会についても、常に参加者が”親も子も主人公”になるために母子の様子やスタッフの対応はどうしたらいいのかを、意見を言い合い、すごい事であると感じています。

スタッフと母たちの複数の目で、親子を見守っていく、この親子教室で働く事ができることは、私にとってしんどいですがうれしい時間でもあります。

*おやつスタッフの感想

・軽い気持ちで何もわからずおやつスタッフの話を受けたのですが、回を重ねた今では、食べるということの大切さを考えさせられ、学ばせてもらえるいい機会を与えてもらったと感謝しています。そしてそのことで参加者やスタッフの皆さんに励まされ、つながっているのが私の大きな力となっているのを感じている。企業と比べとても小さなところかもしれないけれど確かな充実感を持っています。

・材料は何が入っているんですか？“作り方を教えて下さい！”次週には‘作ってみました！’と言われると嬉しいです。

評価

プログラム実施の意義と課題

意義

プログラムにはディスカッションと遊びおやつの3種類がある。

(5番の方法内容で詳しく明記)

ディスカッションの中で親には、自分自身にある問題点の意識付けや「自分だけではない」という孤立感、自己否定感を解消して問題の解決策を感じ取ってもらえるようにお互い学びあう場。また遊びの中で子ども達は、五感を発達させて情緒の豊かさや自分で何かを試したり、発見したりする意思や意欲、そして人への関心と信頼をはぐくんでいく。セルフコントロール(ただ我慢するのではなく、状況や相手に応じて自分の行動を調整できる力)の根元も育ち、心身ともに成長するということをサポートする。

おやつは、楽しく食べることを、生きることを伝える場としている。

課題

人材の確保と養成がプログラム実施が課題となる。支援者が親子を評価するのではなく、参加者の子育てに対して理解や共感をしながら適切な応答ができることが必要となる。それぞれの親の子育てを受容しその内容に適切な応答をする為には自分の判断基準から離れ自由な見方をすることが求められる。さまざまな事例について、支援者内の意見交換を行う事で支援能力の向上を図る。

場所の確保が困難である。場所の広さ、料金、交通手段、長期期間などを備えた場所の確保は大変難しい。地域に根を張るには地域の理解が不可欠である。

③みずべ 「出張ひろば」

実施ひろば名：
江東区子ども家庭支援センター「みずべ」

実施担当者：
・新澤拓治
（大島子ども家庭支援センター地域ネットワーク主任、全体のマネージメント・東陽より他一名）
・若杉詩子
（江東区社会福祉協議会地域ワーカー、全体のマネージメント・協議会より他一名）
・渡辺恵司
（子育て支援グループたんぼぼ：発起呼びかけ人）
・江東区豊洲地域民生委員
親子への直接的な関り・地域連携
・地域ボランティア(各数名)
親子への直接的な関り

実施日時、回数、実施場所
基本的に月二回 第一、第三水曜日
祝日等とぶつかる場合はお休み。
(会場の都合にて)
午前 10:00～11:30

2004 年度
平成 16 年 4 月 21 日
5 月 19 日
6 月 2 日・16 日
7 月 7 日・21 日
8 月 4 日・18 日
9 月 1 日・15 日
10 月 6 日・20 日
11 月 17 日
12 月 1 日・15 日
平成 17 年 1 月 19 日
2 月 2 日・16 日
3 月 2 日・16 日

実施場所
江東区豊洲文化センター1 階和室・会議室

実施対象者
来訪人数は制限なし。
主に 0 歳から 3 歳の子どもとその親

参加実績
参加者数 510 組(延べ人数)
参加ボランティア数 70 人(延べ人数)
参加民生委員数 40 人(延べ人数)
2005・2 月末現在

(実施にあたって)
豊洲地区は新興地域であり、かつ人口急増の地域である。保育園をはじめ、幼稚園、児童館、公園等、子育てに関するリソースが非常に少ない地域であるため、出張型でもよいので、歩いて行くことのできる距離に安心して集える場を地域のかたがたとともに協力し、実施していきたいという思いで始めた事業である。

実施の方法と内容
ひろばは基本的にノンプログラムであり、気軽にゆったりと過ごすことを大切煮している。

会議室を借りるため、朝は会議机を寄せることから始まる。かなり力を伴う重労働であり、年齢の高いボランティアなどにはかなり無理のある作業となっている。

その後おもちゃを濡れタオルで拭き、配置する。

ネンネ、ハイハイ時期など比較的小さい子は和室、それ以上の子は会議室にすることが多い。ボランティアはそれぞれ自分で行きやすい場所を選び、お母さんの話し相手になったり、子どもと遊んだり、また兄弟連れできている場合にはどちらかの子をみていたり

と役割は大きい。

12:00には部屋を明け渡さなくてはならないため11:30でひろばは切り上げとなり片付けに入る、時間的に無理があることは承知しているが、会場の都合上しかたない。

親子とスタッフ・ボランティアみなで片付けをし、最後の10分ほどはスタッフとボランティアで一日の振り返りをする。

実施結果

基本的にどこも行くところがなく、友達も作りにくい地域の現状があるために、開催については非常に喜ばれている。

月2回開催のひろばだが、毎週やってほしいという要望があがるほどである。

新興地のため、転入組みも多く、同じマンションに住んでいても、広場で初めて出会うといったケースも少なくない。

また民生委員等普段あまり関わる事ができない人も自然とつながりができてくるという利点がある。

しかしながら、会を重ねるごとに物足りなくなってくるところもあるのか、何かイベントが欲しい、歌や踊り、手遊びの時間といったものを望む声も多い。

以下はみずべボランティアとして参加し、かつ豊洲ひろばに参加のボランティアによる感想である。

「もっとみずべを」

丸山典子(ボランティア)

「ここに来るとほっとする」赤ちゃん連れのお母さんのこの言葉を聞くと、私もほっとする。「ちょっとうちの子、みててもらえますか？」頼られるのかしらとうれしくなる。東陽のみずべにボランティアとして通いだして3年半。現在は時々みずべ、月2回の豊洲子育てひろば、それと自宅近くで開設した月2回の子育てサロンに参加している。子育てボランテ

ィアのお陰で、いろいろな人達とお知り合いになれている。

今日もたくさんのお母さん、子どもたちに会えるという気持ちが私をうきうきさせる。ちょっと合わない間に、子どもたちは顔も身体もできることも見違えるほどに成長していて、驚きと喜びになる。「こんなに育っているよ、頑張ってるね」とお母さんを応援したくなる。

道を歩いていて、赤ちゃん連れに出会うと、「みずべを知っていますか、一度来てみて。」と声をかけたくなる。江東区に在住しているすべてのお母さん達、お父さん達にも、これからママ、パパになる人達にも、みずべを知ってもらい、有効に活用してもらいたいと心から願う。

みずべがもっともっと増え、もっと行き易くなるだけでなく、地域の人達が積極的に参加しやすい場になっていってほしい。そうすれば、知り合いも増え、子どもたちの笑顔や成長を、もっとたくさんの人達で応援できるようになるのではと思う。



8 豊洲ひろば

豊洲エリアは大規模な開発が進んでいる最中で、駅に隣接した公園も閉鎖しており、親子で集える貴重な場になっている。転居してきて間もない参加者も目立つ。江東区は大型マンションの建設ラッシュが続いており、今後もその重要性は増してくるはずである。

そうした中、たとえ月2回とはいえ、定期的なひろばがあるということは、親たちにとっ

てとても助けになっているのではないかと思う。

この事業は自施設のみならず、社会福祉協議会、区の担当課、地域の民生委員、ボランティアなどの協力によって成り立っているということが大切な要素である。

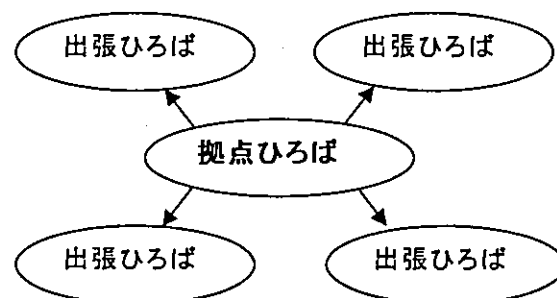
課題としては、貸し会場であるがゆえの不安定さがある。金銭的な面では補助を受けたりといったかたちで切り抜けられなくもないが、予定調整が不確実であり、部屋を借りられない場合も生じてくる。この辺は常設のひろばと違う出張型の宿命とも言える。屋外型であれば天候に左右されるし、室内であっても、通常の貸し部屋であれば貸し出しが抽選になったり、時間的な制約を受けるということがつきまってくる。また環境構成的なアプローチはかなり難しい。遊具等は館の協力が得られれば倉庫などに置いておくといったことも可能だろうが、拠点が複数の場合には遊具をおきっぱなしというわけにもいかず、毎回限られたもので遊ぶことになる。場の提供が主なねらいであるからその辺は割り切りも当然必要であるが、持ち運びが簡便なママゴトのセットや軽いついたてなど、出張型ひろばにマッチした遊具の開発もこれからの課題である。

もう一つの課題はボランティアを含む、スタッフの連携や養成が課題となってくる。常設のひろばであれば、日々の振り返りやミーティング、スタッフ研修などが設けられるが、出張型でさらにコラボレーション型、ボランティアも派遣型でなく地域から募るということになると、そこでの連携は、ごく限られた時間の中で進めなくてはいけない。事務的な連絡事項は前後の少しの時間でも可能だが、終了後の振り返りにしても貸し部屋の場合は12時で部屋のあけ渡しがあり、ゆっくり時間を

とることが出来ない。場所の算段がつけば少しゆとりをもって今日あった出来事などを話しあい、反省を含め共有できる部分も多いはずであるが、どうしても制約がある。

ひろばが地域づくりの一旦を担うとすれば、ボランティアはその地域で募ることがよいと思えるが、課題も多い。

今後考えられる方策としては、カナダの子ども家庭援助の中のハブモデルに見られるように、拠点施設があり、そこからの出張型で、遊具等の持ち運びから人材の育成と派遣をし、拠点を中心として連絡や研修を行っていくという方法が考えられる。江東区は人口40万人の地域だが、現在拠点となるべき子ども家庭支援センターが3箇所、今後数年以内に5箇所となる予定である。そこを拠点とし複数の出張先（児童館や保育園なども考えられる）をもつネットワークモデルの形成をめざしたい。



(8)企業との連携

①みずべ

企業との連携プログラム (ヒアリング記録)

実施ひろば名

江東区子ども家庭支援センター「みずべ」

実施担当者

新澤拓治(江東区大島子ども家庭支援センターみずべ)

大豆生田啓友(関東学院大学)

伊志嶺美津子(関東学院大学)

実施日時、回数、実施場所

実施対象者

実施の方法と内容

後述でプログラム予定を掲載

実施結果

約半年にわたり、(株)NEC ソフト人事部(以下 NEC ソフト)と連絡調整をつけていたのだが、実施の段になり参加者が集まらず、開催することができなくなってしまった。

企業側もおおまかには乗り気であったので、開催が出来なかったことに関してはとても残念だが、話し合いの経過と実施予定日に NEC ソフト人事部にヒアリングをすることができたので、その記録を掲載する。

経過

9 月 本研究の主任研究者である伊志嶺より企業連携の候補として、江東区に問い合わせたところ複数の企業を紹介されたところ連絡をうける。その中の一社である NEC ソフト株式会社は、江東区東陽子ども家庭支援センターみずべ(以下みずべ)に以前、子育て中の親に対する支援ソフトの開発の為、ヒアリングに来

たことがあったのを思い出し、その時の担当者と連絡をとる。

10 月 連絡をとったのは経営企画部であり、その部署より人事部を紹介される。

電話・メール等でやりとりをし、と新澤・伊志嶺で NEC ソフトへ出向き、企画主旨と計画、内容について話し合いをする。

11 月 新澤・伊志嶺・大豆生田の日程と NEC 側の日程を調整し 12 月に開催するという方向で日程を調整

12 月 NEC 側で他の企画とのすり合わせや周知などについてももう少し時間がほしいということになり順延とし、内容に関しても微調整をする。

2 月 順延、日程調整を繰り返し、最終的に 3 月 15 日に開催することとする。

経過の中でのやりとりは、お互いに本来業務の多忙期も重なり、メールなどの手段をもちいながらも、お互いにレスポンスが悪く時間がかかってしまった時もあった。

最終的にはターゲットを絞り、参加を募ったが人数が集まらず、当日は新澤が担当者に経過の反省を含め、企業の現状等についてヒアリングをする。

ヒアリング記録

【話し手】NEC ソフト株式会社 人事部
人事マネージャー
藍葉秀人さん

【聞き手】江東区大島子ども家庭支援センターみずべ

新澤拓治

日時 2005年3月15日(火)

○開催、開催のタイミングについて

今回開催のタイミングとしては良かった。次世代育成支援の行動計画が義務付けられ、その一環という意味で会社としてもやりやすいと思っていた。

実際の会社動きとしては、春闘が2月末から始まり、3月半ばに回答をするという状態で、その意味では不安定な時期ではあったかもしれない。

ワークライフバランスという視点は会社も持っているが、これから討議をしていく段階、長時間残業や子育てという話題も出ている。

ただし實際上期末ということもあり、取り組みをはじめた段階で職員に周知できなかったという反省はある。計画は出すとしても、こまかなところで社員へのアプローチが足りなかったかもしれない。

○対象の持ち方

今回江東区に住んでいる人を対象にしてみたが、反応がなかった。会社の中で子育ての話をするという雰囲気になかったのかもしれない

(対象：江東区在住 子どもが就学前全体で11人 そのうち女性は2人)

直接おさそいの社内メールを出したが反応がなかった。

現在会社の中では50名ほど育児中短時間業務をしている。それは入学してから一年間取ることが出来る。昨年度労組との話し合いで期間が伸びた。学童保育が充実しているわけでもないので実際は保育園時代よりも学童期が手がかかるという声があがった。その制度は正職員がとれる制度。今回法改正があったので嘱託も順次取れるようになると思うが、職員5000人の中で嘱託は20名程度。正社員率高い職場である。

○受け止められ方

メールの反応から考えると。単純にヒアリングに協力してほしいという感じに

なってしまったかもしれない。何回かきちんとやりとりをしていけば違った反応があったかもしれない。もう少し関心度は高まるかもしれない。会社としても子育てへの関心を高めようといった施策もしてはいるが、関心度や、理解度、最初の敷居を低くする工夫がもっと必要。

他にもの医者講演などのイベントがあるが、参加率はそれほど高いという訳ではない。

○会社の現況

前提条件として、会社としても余裕がなくなってきたということがあつた(時間的に)。なかなか時間が割けない現実とどう向き合うか、大きな課題である。上の方(上司)とのやりとりは現在のタイミングがあるのでよいが(行動計画がらみなどで)、常に優先事項として取り上げられるかどうか分からない。ただし、担当役員が女性なので今後の可能性としてはある。

(実際の現場での受け止められ方は?との問いに)

一般論でいえば直属の上司などの理解ということがライン(現場)からすると唐突感があるかもしれない。自分は人事部門にいるから、そういう機運があることも知っているが、社会では少子化の問題がとりあげられてはいるが、みなに意識があるわけではない。

またソフト産業ならではの課題もある。全ての仕事が時間で値段が決まる。この時間に何をやったということ積み上げてプロジェクトのコストを算出する。今まで半年かかっているプロジェクトを三ヶ月でやるなどより短期間に内容の濃い、また複雑な仕事をという状況であり、その中で余裕をもった時間をどう作るのかといったことは大きな問題。

(資生堂さんやベネッセさんなどの取り組みをどう感じるか?との問いに)

IT関連は技術競争が主。いまだおちつ

いた文化がまだない。がしかし IBM などでは取り組んでいる。業界事態が悪いわけではない。企業的な発想の違いもある。在宅ワークや人を生かすという発想が特に外資などにはあるのではないかと思う。

NECもNECソフトも同じような程度取り組みをしているが、ファミリーフレンドリー的な要素を作って生きたい。女性の活躍というものがあるが、今までの若くて男でという条件は古典的。今後それではだめだと思う。

全体的にはそういう傾向がある中、切迫したニーズが出るまえに、制度が先行している面もある。(行動計画など)現場からあがってきた制度ではない。(もともと厚遇ということもあるかもしれない)本来はそうしなくては(現場からボトムアップ)いけないが、今は制度ありきになってしまっている。そうすると制度だけうまく利用する人がでてくる。どうしてもそれを管理職は危険視してしまうところがある。

(ファミリーフレンドリー企業など表彰されることについてはどうか?との問いに)

社員としてはあまり関心がないかもしれない。男性もその企業にいることによって、意識が高くなってくればよいと思う。

○次世代育成支援の計画

ファミリーサポートセンターを使用したときの利用料を会社でバックアップするという計画がある。協力会員になることについてはOBや家族に登録をアピールしていく。

8 評価—プログラム実施の意義と課題

實際上プログラムを実施できなかったという部分では評価は出来ないが、やり取りの経過やヒアリングの中で学んだことから意義と課題を見出したい。

・企業の実情を知る

今回プログラム提案という形でこちらから内容や進め方を作って、やりとりをしてきたが、その中で企業の立場、働いている人のニーズなど、こちら側としてももっとその辺を理解し、実情に合わせた、戦略展開が必要であると感じた。ヒアリングの中にもあるように、現在の経営効率を高めるという風潮の中、社員の家庭生活に関わるような取り組みがどう受け入れられるのか、良い家庭生活が会社への貢献へも繋がるということは企業の中にも一般的に受け入れられる内容だとは思えるが、その具体性や会社へのメリットなども同時に一緒に考えていかなければいけない。

・企業側へ開催についての援助を

今回社内での参加者募集に関しては企業まかせにしてあったが、ポスターの作成や社内ニーズ調査など大企業であればあるほどその辺のソフト面のアイデアなどに援助をしていけばよかったと反省した。

※次ページに参考のため、(株)NECソフトに渡した企画書を掲載